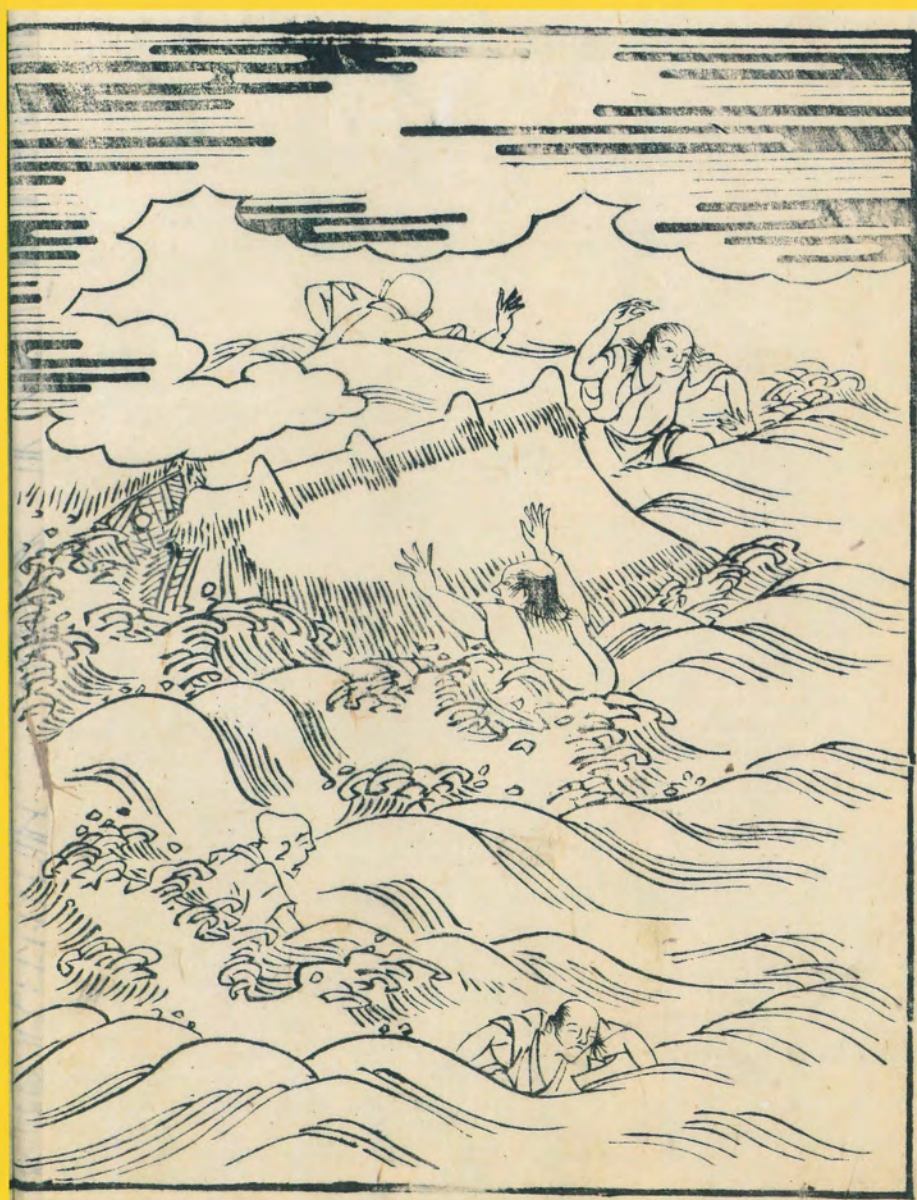


# 知ろう! 学ぼう! 記録資料に見る南海地震

平成28年度特別企画展解説



『絵本太平記』(江戸後期) 康安地震津波にのまれる人々

平成28年度とくしま政策研究センター支援事業  
「徳島県内における南海地震に関する歴史資料の調査研究」

文化の森総合公園 徳島県立文書館

## この本を読まれるみなさまへ

私たちが住む徳島県は、これまで四国の太平洋沖の南海トラフを震源とする大地震に何度も見まわられました。南海地震と呼ばれるこの地震は、おおよそ100年から150年の間隔で起こっています。

歴史の上では、1361年の康安地震、1605年の慶長地震、1707年の宝永地震、1854年の安政地震、そして1946年の昭和地震がよく知られています。これら過去の地震は、津波その他によって各地に大きな被害をもたらし、多くの尊い命と財産を奪いました。この南海トラフ巨大地震は、近い将来必ず発生するといわれています。

過去に起こった南海地震についての記録は、たくさん残されています。地震や津波を直接体験した人たちが、地震・津波の様子や被害の状況、さらには町や村の復旧・復興の取り組みなどを文章にして書き残しています。また、被害の様子や後の人への教訓(教え)を石にきざんで、石碑としても残しています。

今年、昭和南海地震が発生してちょうど70年目にあたります。私たちは、これからの防災に役立ててもらうため、過去の地震・津波のことを書いた貴重な古文書や市町村役場に大切に保存されてきた公文書を調べ、研究することにしました。この本は、その調査をとおして得たことをわかりやすく紹介しています。

地震の体験をみずから記録して、後の人に伝えようとした当時の人びとの熱い思いと強い意志を受けとめて、この本をさまざまに活用してほしいと願っています。あわせて、それぞれの地域に伝わる古文書をはじめとする文化財の大切さを知ってほしいと願っています。

平成28年10月25日

徳島県立文書館長 山下知之

# 地震記録を残す人々の意志

四国の南方沖にある南海トラフを震源地とする南海地震は、おおよそ100年から150年に一度という周期で襲ってくる自然災害だと言われています。そのため南海地震に遭遇した人は、その事実を次の世代に伝えようとしてきました。ある者は街角に立てた石碑で、ある者は日記の中で、ある者は数年後にまとめられた記録書をとおして伝えようとしてきました。



【写真1】震潮記

江戸時代の終わり頃、宍喰浦（現在の海陽町の組頭庄屋（村役人）であった田井久左衛門は1854（嘉永7）年11月5日の地震を身をもって体験し、地震以前の様子や、地震や津波による町の大きな被害、その後の余震や町の復旧への動きにいたるまで、こと細かに書き残しています。『震潮記』と記されたこの記録には、嘉永の地震以外にも、宍喰浦に残っていた古い書物を見て、1512（永正9）年8月に起きた大津波、1605（慶長9）年12月に起きた地震津波、1707（宝

永4）年10月に起きた南海地震について、後世に書き残しています。

この『震潮記』を現代語に翻訳した田井晴代さん（田井家の子孫）は、出版した本の中で「過去の災害を知った上で、それぞれの地域で現状との相違点や未来を見据えた防災対策、防災意識、予知情報を習得し、ともに支え合い『一人の生命も失うことのないわが市・わが町』をめざす手段のひとつとして活用されることを念願しています」と書いています。久左衛門と晴代さんは、時代を超えて貴重な記録を「地域の記憶」として次の世代に残す努力をされたのです。

徳島県内には過去に起こった南海地震に関する地震津波についての記録・古文書・石碑・扁額、さらに町役場や市役所に残された昭和南海地震についての公文書まで数多く残されています。1946（昭和21）年の南海地震からちょうど70年が経過しました。私たちの多くは南海地震に遭遇していませんが、これからいつ起きてもおかしくないといわれています。これまで多くの人々が残してきた南海地震に関する歴史資料を、次の世代にいかんにか利用できるかたちで引きついでいくのか、私たちの行動が問われています。

表1 徳島の被害記録がある南海地震一覧

こうあん 康安の南海地震	康安元年6月24日（1361年7月26日） 地震・津波にて大きな被害。『太平記』に阿波の雪（由岐）で津波被害の記述あり
えいしやう 永正の津波	永正9年8月4日（1512年9月13日） 宍喰浦の史料に記述あり。津波にて大きな被害
けいちやう 慶長の地震津波	慶長9年12月16日（1605年2月3日） 宍喰浦の史料に記述あり。津波にて大きな被害
ほうえい 宝永の南海地震	宝永4年10月4日（1707年10月28日） 東海・東南海地震と連動したとされる。地震・津波で大きな被害、古文書・記録あり
あんせい 安政の南海地震	嘉永7年11月5日（1854年12月24日） 東南海が前日に発生。阿波国内で死者200余人。地震・津波で大きな被害、古文書・記録・日記など多数あり
しやうわ 昭和の南海地震	昭和21（1946）年12月21日 地震津波で大きな被害。県内で死者202人、流失家屋413軒

※和暦の年月日は、史料の記述どおり。西暦の年月日はグレゴリオ暦（太陽暦）による。

1361年

# 康安の地震 — 『太平記』に記された由岐湊<sup>ゆきみなと</sup>



【写真1】地震で倒れた建物  
（『太平記』第36巻）



【写真2】津波に襲われた雪（由岐）湊  
（『太平記』第36巻）

遠い昔から、阿波国（徳島県）はいくどとなく南海地震<sup>おそ</sup>に襲われてきました。これらの南海地震のうち、阿波国の被害状況が記録されたもっとも古いものが、1361（康安<sup>こうあん</sup>元）年6月24日に発生した康安の南海地震です。このころの日本は、南北朝時代という戦乱の時代でした。この南北朝時代の社会の様子を描いた『太平<sup>たいへい</sup>記』という本の中に、康安の南海地震のことがくわしく書かれています。

この年の6月から10月ころにかけて地震が続き、各地で大きな被害が出ています。ことに阿波国の雪湊<sup>ゆきみなと</sup>には大山のような津波が押しよせ、約1,700軒の家がすべて流されて、すべての住民は一人残らず犠牲<sup>ぎせい</sup>となりました。この雪湊は現在の海部郡美波町にある由岐地区のことだと考えられています。

6月22日には真夏だというのに真冬のような寒さとなり、雪が降るといふ異常気象となります。そして、24日には南海地震の本震が発生しました。今の大阪湾に大津波が押しよせますが、その前にいったん潮が引いた海岸で魚をひろっていた数百人の人々が津波にのみこまれてしまいました。

さらに鳴門の海では海水が完全に引いてしまい、海底の岩の上に周囲が30メートルを超えるような巨大な太鼓<sup>たいこ</sup>が姿をあらわしました。最初は恐れをなしていた近くの人たちも、数日後に太鼓の近くに集まって、寺の鐘<sup>かね</sup>をつくような木で太鼓をたたいてみました。すると天地を揺るがすかのような大きな音が鳴りひびき、驚いた人々は四方に逃げ散りました。やがて海の水が元にもどり、太鼓は姿を消してしまったといひます。これは揺れ動く大地を太鼓にたとえたものでしょうか。

『太平記』には不正確でおおげさな記述がありますが、由岐をはじめとした阿波国に大きな被害が出たのは事実であると考えられています。江戸時代の後半に徳島藩が作った『阿波志』(1815年)という本の中には、「由岐は1361年の大地震による津波で村が全滅したが、このときの地割れでできたのが東西由岐の間にある由岐池である」という言い伝えが書かれています。

康安の南海地震が起きたころの由岐は、近畿地方と土佐国(高知県)や九州の間を行き来する船が立ち寄る大きな港町でした。それにしても1,700軒という家数は多すぎると考えたのでしょうか、江戸時代の末に書かれた「南朝以来地震抄録」(多田家文書)の著者は「1,700というのは津波で流された家数の合計で、被害が特にひどかった由岐の地名が代表としてあがったのではないか。この数字は1854(嘉永7)年に発生した嘉永の南海地震のときに津波で流されたこの地方の家数とほぼ一致する」という意見をのべています。また、鳴門に出現したという太鼓については「鳴門海峡が完全に干上がった」という記述には疑問がある」と書いています。

『太平記』は康安の南海地震の10年後くらいに完成したと考えられています。このころの阿波国に住んでいた人々が直接書き残した記録はほとんど残っておらず、阿波国における地震や津波のくわしい被害はよくわかっていません。その意味で、多少記述が不正確でおおげさな数字が書かれているにしても、『太平記』は南海地震の歴史を語る上で、とても重要な歴史資料であるといえます。



【写真3】潮が引いた海岸で魚をひろう人々  
(『太平記』第36巻)



【写真4】干上がった鳴門の海に出現した太鼓  
(『太平記』第36巻)

1605年

# 慶長の地震 — 宍喰浦をおそった津波

1512(永正9)年8月、海部郡宍喰浦(現在の海陽町)を突然津波が襲い、多数の犠牲者が出たと「宍喰浦成来旧記」という古文書に書かれています。このとき、多くの人々が城山に逃げましたが、城門が閉まっていたために中に入らず、被害が大きくなったと伝えられています。この永正の津波は、これ以外に記録のないまぼろしの津波、として知られています。

1605(慶長9)年12月16日、宍喰浦はまたしても津波に見まわれました。宍喰浦にあった円頓寺の住職が書き残した「円頓寺旧記」によれば、この日の午前から午後にかけて地震が起きました。浦中の泉から水が噴き出したり、地割れが起きて泥水がわき上がるなどの液状化現象も発生しています。そして、午後6時ころに津波が宍喰浦をおそいます。この津波は大きな船がかなり内陸まで押し流されるほどの大きなものでした。人々は山に逃げますが、多くの子どもや老人などが途中で波にのまれてしまいました。また、寺の住職たちは仏像や大切な書類を持って逃げましたが、そのために命を落とした者もいました。

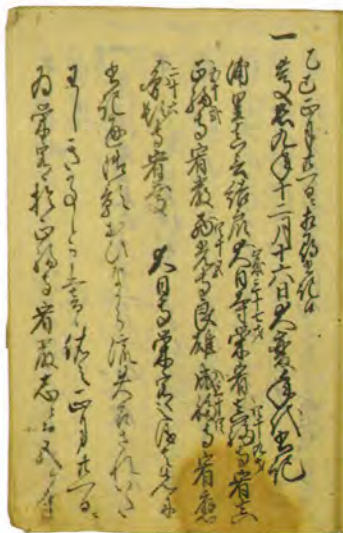
この地震と津波で宍喰浦の寺や民家はすべて倒れたり流されたりし、人々は真冬の寒さのなかで数日間にわたって野宿せねばなりませんでしたが、まもなく徳島藩の役人が調査に訪れ、救援のための米や麦などが徳島城下から届けられました。こうして、宍喰浦は復興への第一歩をふみだします。

宍喰浦から少し離れた鞆浦(現在の海陽町)には、大きな岩に慶長の地震・津波と1707(宝永4)年に起きた宝永の地震・津波の碑文が並んでいます。これによると、鞆浦でも慶長の地震・津波で約100人の犠牲者が出ています。



【写真2】鞆浦大岩慶長碑・宝永碑

この慶長の地震・津波に関しては、日本各地で記録が残っていますが、地震のゆれにくらべて巨大な津波が起こる「津波地震、であった」という説があります。宍喰浦の場合も、津波が来ると思っていなかったことから避難が遅れ、被害が大きくなったことが考えられます。これから起こる地震・津波にそなえて、私たちも気をつけておかなければならない点ではないでしょうか。

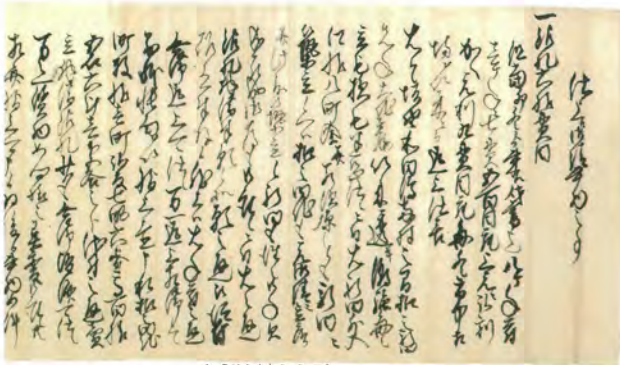


【写真1】円頓寺旧記

1707年

# 宝永の地震 — 和田島村の新田開発

1707(宝永4)年の宝永南海地震による津波被害があった沿岸部では、その復興は簡単ではありませんでした。たとえば、紀伊水道に突き出した半島の先端にあたる那賀郡和田島村(現在の小松島市和田島町)では、地震後、地盤が低くなったからか、たびたび海水が田畑に入り込む状態(「潮入」)となり、作物の被害が絶えませんでした。百姓たちは、徳島藩から年貢を免除してもらうなどして、困難な状況を何とか乗り切っていました。



【写真1】「仕上御請書物之事」(森家文書、1735年)

この古文書は、和田島村の分平が、1735(享保20)年3月9日に、徳島藩の御蔵所(年貢・財務を担当する役所)に対して提出した文書の控です。分平によれば、坂野村と和田島村との間にある間ノ新田でも、「透キ潮」といって海水が田畑に浸透し、塩害で作物ができない状態が続いていました。海面に接する低地や埋立地では、宝永地震から28年も過ぎたこの段階でも、状況はなかなか改善できていなかったのです。

そこで分平は、間ノ新田の北西に広がる入江(広さ18町余)などを埋め立て、新たに新田を造成しようと考えました。そうすることで間ノ新田での「透キ潮」を食い止めるだけでなく、田畑の面積も増やすという一石二鳥をねらったのです。この直前に和田島村の西隣では、宝永の地震津波により破壊された新田(のちの和田津新

田)の復興が栗本家の手によって始まっているので、その影響もあったのでしょう。分平は、その新田造成の費用として銀60貫目という大金を御蔵所より借り、8年間で利息も含めて分割して返すこと、もし返すことができなければ分平が持つ田地を売り払って返すことを御蔵所に約束しています。

分平は、村役人ではありませんが、この時すでに田地11町2反7畝6歩(高115石6斗1升5合)を持つ大地主でした。今回の新田造成には、その経済力を背景に、また宝永地震後の「透キ潮」という悪条件を逆手にとって、新田開発者としてより一層の飛躍をめざそうとした分平のしたたかさうかがえます。



【写真2】「和田島村と間ノ新田1814(文化11)年」  
分平が開発を始めた新田部分は1767(明和4)年に完成し、「焼木新田」と呼ばれた。間ノ新田(黄色)から北西に広がる部分(灰色)が該当する

なお、和田島村では、1854(嘉永7)年に起きた安政南海地震においても、人の被害こそありませんが、一部に被害がでました。幅約54m長さ約1,100mの広い範囲にわたり地割れ(「土地裂ケ」)や液状化現象(「水吹出し」)が現れ、場所によっては60cmほど地盤沈下が起こり、土手や用水路が崩れ、水田に潮が入り込むなどしました。漁具である罾網・建網なども流失しました。このように和田島村では繰り返し地震津波の被害をうけましたが、一方では生産条件を向上させようとする人々の絶え間ない努力がありました。

1707年

# 宝永の地震

— 牟岐八幡神社の額と浅川村の地蔵台座 —

## 牟岐八幡神社の額

今から310年ほど以前のこと、東海～近畿～四国～九州の太平洋岸一帯に大地震・大津波が襲いかかりました。1707(宝永4)年に発生したこの大地震は宝永地震と呼ばれ、歴史上、日本近海で発生した最大級の地震と考えられています。宝永地震は、阿波の「南方」(海部・那賀郡)沿岸の村浦にも襲来し、大きな被害を各地にもたらしました。この時のあり様を書き記した貴重な記録の一つが、海部郡牟岐町の八幡神社にある木製の額で、今も大切に残されています。

牟岐八幡神社は、牟岐川の河口部に位置し、すぐ前に牟岐港が広がる海辺に建てられた歴史の古い神社です。その拝殿の壁に墨書された一枚の古い額がかけられています。これは、宝永地震の4年後の1711(正徳元)年に書かれたもので、八幡神社の古い由緒(いわれ)とともに、当地を襲った宝永地震について、次のように書き記しています。

1707(宝永4)年10月4日の午後2時ごろ、大地を揺るがす激震が牟岐地方を襲った。このような大地震の後には必ず津波がやってくると、昔から言い伝えられていたが、果たせるかな、時を移さず静かであった海面がにわかに騒ぎ立ち、「洪波」(大津波)が周辺の浦里をのみ込みながら押し寄せてきた。津波は2回、3回と襲来したが、その結果、牟岐浦では流失家屋7百余戸、溺死者(おぼれて亡くなった人)110余人という痛ましい犠牲を出した。

この時の神主阿部丹治義成が、ご神体を守って裏山に逃げ境内の方向を見たところ、八幡神社の社殿は津波の引き潮にひかれて沖まで流されたが、2度3度と寄せる波で今の境内地に再び打ち寄せられて残った。社殿は3年後の1710(宝永7)年に修築された。

このように牟岐浦は、壊滅的な打撃を受けてしまいました。津波の力の恐ろしさを思い知らされます。



【写真1】牟岐八幡神社 額



## 浅川観音庵の地蔵台座銘

牟岐からさらに数キロメートルほど南に下った所、海陽町浅川浦の小高い丘に一基の地蔵尊像が立っています。これは、宝永地震で亡くなった犠牲者の供養のため、浅川浦の住人たちが地震から5年後の1712(正徳2)年7月に造立したものです。地蔵尊像の台座には次のような銘文が刻まれています。



【写真2】浅川観音庵地蔵

1707(宝永4)年10月4日午後2時ごろ、大地震が発生。激しい揺れがおさまった後、沖合の海面が異常に盛り上がり、高さ3丈

ほど(約9メートル)の「大汐」(大津波)が浅川湾一帯に押し寄せてきた。津波の引き潮によって、浅川浦では寺院1軒を残して、すべての家々が海中に流され、おぼれて亡くなった人は140余人に達した。ここで亡くなった人のめい福を祈るため、地蔵像を一体つくり、供養して安置する。

浅川浦住人

浅川湾を望む小高い丘に立つ地蔵尊像は、災害で亡くなった人々の霊をとむらうとともに、地震・津波の脅威を後世にいつまでも語り伝えるための記念碑でもあります。

## 宝永地震と富士山の噴火

1707(宝永4)年の宝永地震は、南海トラフで起きた最大規模の地震であったと考えられています。宝永地震は、東海・東南海・南海の3震源域が同時に連続的に動いた巨大地震と推定されています。

この地震は各地に大きな被害をもたらしましたが、特に四国地方では津波の被害がすさまじく、隣の土佐国(高知県)では、倒壊家屋5,000余戸、流失家屋1万2,000余戸、死者・行方不明2,800人余の大惨事となったと言われています。また、伊予国(愛媛県)の道後温泉では145日間にわたって温泉の湧き出しが止まったそうです。

また、その年の12月16日、今度は富士山で大噴火が起こりました。噴火は10日間あまり続きましたが、その間、関東一帯に大量の火山灰が降り積もり、農作物にも大きな被害を与えました。江戸の町では、降った灰のために太陽がさえぎられ、昼間でも行燈(明かり)を灯したということです。

宝永地震、そして富士山の噴火と自然災害(天変地異)を相ついで体験し、当時の人々は改めて自然の恐ろしさを実感し、多くの教訓を学んだことと思われます。



1854年

# 安政の地震

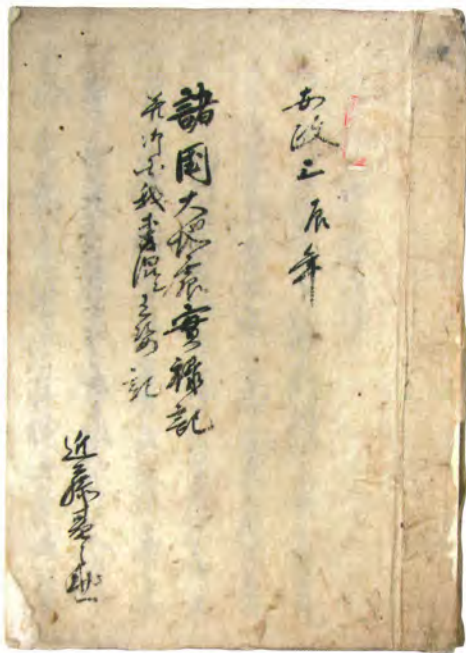
—板野郡大松村・中喜来村の被害

なかぎらい

## 大松村(現徳島市川内町)の地震記録

徳島県での安政南海地震の記録のひとつに、大松村(現在の徳島市川内町)の組頭庄屋(村役人)近藤基之助が地震から2年後の1856(安政3)年に書いた「諸国大地震実録記并御国我等取混シ有姿記」(中財家文書)があります。

この記録は、基之助が大松村周辺で実際に体験したり、地震について見聞したことについて詳しく書かれています。



【写真1】「諸国大地震実録記并御国我等取混シ有姿記」表紙

大松村では、30軒ほどの家が倒壊し、さけた地面からは大量の土砂が吹き上がりました。近くの村々では、地盤が1メートルもさがり、神社や寺がつぶれる被害もできました。

また、加賀須野村(現在の徳島市川内町)の川筋には、3メートルの津波が来たようです。津波により村の中は荒れ果て、地面からは、くじらが潮を吹いたように土砂水が吹きだしました。そのため、あたり一面が海のようになっ

しまったといった悲惨な状況も記録されています。

同じ年の伊賀(三重県)地震や東南海地震で起きた火災の記録も書き残されています。ある地域では、ちょうどお祭りで火を使っていたことにより大火事となり、またある地域では城や町中の家が残らずつぶれ丸焼けになるなど、各地で大きな被害がでました。さらに、約30軒ほどの家が建っていた村が、深さ約3.6～5.4メートルの池になってしまった被害まであったようです。



【写真2】火事に関する記述

そんな状況を聞いていた基之介は「火の用心第一」の教訓をいかし、南海地震が起きたときには「たき火を消し・火鉢を外へ持ち出し・こたつは使わない」などの防火対策をして家を守ることができました。すると家の周りには被害にあった40人ほどの人が集まってきて、大人から子どもまで途方に暮れ、布団で寒さをしの

ぎ泣きながら念仏ねんぶつを唱となえたといひます。それでも近くの村々ではつぶれた家から火けむりや煙が発生し、遠くは小松島・県西部あたりでも火事の被害があったといひます。

過去におきた地震では火災も同時に起こっています。料理・お風呂・明かりなど生活のあらゆるこちらで火を使っていた先人たちが残した「火の用心」という防火意識は、電気やガスを使って生活する私たちにいまなお引きつがれているのです。

また、安政年間には、地震のほかにも阿波国あわ（徳島県おそ）を襲った異常気象いじょうがありました。それは、大雪です。近藤基之介こんどうものすけが住んでいた大松村は、平地のため山間部にくらべて雪が少ない地域ちいきです。「実録記」には安政南海地震直後の11月16日の記事に、次のように書かれています。



【写真3】大雪に関する記述

十六日の四ツ時（午前10時または午後10時）から大雪が降り…少しの間に一尺しやく（約30センチメートル）ほど積まりました。

当時の地元のお年寄りでも、約30センチメートルも積もった大雪は記憶になかったようです。なお「実録記」に見える11月16日は、太陽暦では翌年の1月4日にあたります。

## 中喜来浦（現松茂町）の敬諭碑けいゆひ

みなさんが日頃歩いている通学路や公園、神社、寺などで石碑を見たことがあるでしょうか。石碑には、時間とともに忘れられてしまう貴重な記憶きおくが刻まれています。

松茂町中喜来まつしげ なかぎらいにある中喜来春日神社かすが けいだいの境内には、「敬諭碑けいゆひ」（松茂町指定有形文化財）という石碑があります。1854（嘉永7）年に発生した安政南海地震の被害を、呑海寺どんかいじの住職が漢文で書き、中喜来浦なかぎらいうら（現在の松茂町）で藍の商人あいをしていた三木與吉郎みき よきちろう光治が地震・津波碑として建てました。



【写真4】敬諭碑

碑文には、激しい揺れによる家屋の倒壊とうかいと火災、地面が粘土ねんどや泥どろのようになってしまう液状化現象や津波により田畑が水びたしになってしまう被害など記されています。また、お互いに助け合ひなんって避難生活を送った様子も刻まれています。

こうした過去の歴史から教訓を学び、日頃から地震などの災害に備えることが大切です。むかしの記録や石碑は、現代に生きる私たちへのメッセージなのです。

1854年

# 安政の地震 — 商人が書き残した日記

みなさんは、日記を書いていますか？毎日書いている人、特別な出来事があったときにだけ書く人、まったく書いていない人、人それぞれでしょう。また、日記を書き残す目的も人によってさまざまで、身のまわりで起きた出来事を忘れないためや、後の人へメッセージとして残すためなどが考えられます。ただ人は、何か衝撃的な出来事に出会ったとき、それを日記や手紙などに書き残す（現在なら、家族や友人にメールをする）場合があります。それは今も昔も変わりません。

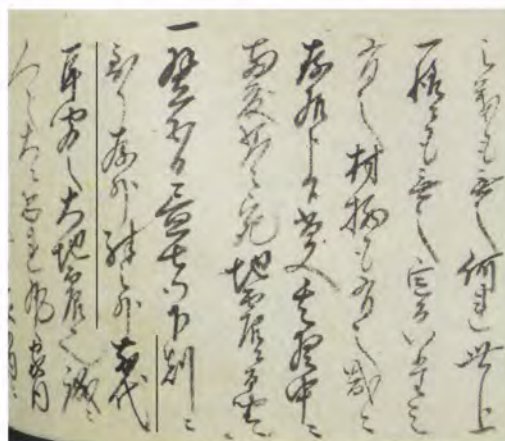
さて、江戸時代に巨大地震に遭遇した徳島の人々が書き残した日記が、今日まで伝えられています。ここでは、阿波国名西郡高原村（現在の石井町）の藍商元木家の「加登屋日記」（写真1）と阿波国美馬郡半田村（現在のつぎ町）の敷地屋兵助が書き残した「兵助日記」（写真2）をもとに、安政の南海地震の状況をみてみましょう。



【写真1】「加登屋日記」

1854（嘉永7・安政元）年11月4日午前10時頃、東海地震が発生し、その30時間後の5日午後4時頃、今度は南海地震が続いて起きます。日記には、この2つの地震が記されていますが、

特に5日の南海地震については、「強大な大ゆれ」や「前代未聞の大地震」とあります。



【写真2】「兵助日記」

まず、「加登屋日記」によると、城下町徳島の家の約3割が倒壊し、3～4割の家が半壊、残りの家も被害を受けたこと、地震の後、内町魚ノ棚などから出火した火は燃え広がり、家老の稲田・賀島両屋敷も焼失したことなどがわかります。南の小松島では、津波や火災が発生したことが、那賀・海部郡の沿岸部では、「高浪」（大津波）が押しよせ、被害を拡大させたことなども記されています。

一方、「兵助日記」によれば、5日夕方の地震の後も、絶え間なく余震が続いたことがわかります。5日夕方から翌朝までに32回揺れたとあります。地震の恐怖によって一睡もできなかったのでしょう。その後も、6日には10回などのように、余震の数がこと細かに記されています。10日頃になると人々も地震に慣れ、しだいに落ち着きを取り戻し、家業に専念し始めたようです。

2つの日記には、安政の南海地震に関する具体的な事実が記されています。これらは、過去の南海地震の状況を知る上で貴重な歴史資料であるとともに、先人が日々の生活のなかで書き残したメッセージであるといえるでしょう。

1946年

# 昭和の南海地震 一県と市町村の公文書

昭和の南海地震が起きた1946(昭和21)年12月21日は、第2次世界大戦の終戦からわずか1年あまりのことでした。戦地からの帰還や国外からの引き揚げなどが続く中、紙などの生活物資は極端に不足していました。そのため、南海地震では現代から一番近いわずか70年前の地震でありながら、その当時に作られた具体的な文書などはほとんど残されていないと考えていました。しかし、震災の大きな被害に対して、実際には大変な時間と労力を費やして、その実態を調査・把握するために文書を作成し、復旧・復興への努力を積み重ねていたはずです。そうした文書は少しでも残されていないのでしょうか。

徳島県立文書館が所蔵している公文書(県庁で作成・受理された公式の文書)に「昭和21年度起債許可書」という文書つづりがあります。

この文書の表紙にはうっすらと赤鉛筆で「震災関係」と書かれていました。この「起債許可書」は、震災後被害を受けた各市町村が緊急に復旧のための資金を得るため、起債(復旧・復興の資金を借りる)の許可を徳島県に求めた文書をつづったものでした。そのため、市町村の実際の被害状況や、復旧のために必要な金額、さらにどのように借金を返していくのかという計画書までつけて提出しなければなりません。そうした書類を、市町村の役場が昭和21年度が終わる昭和22年3月31日までわずか3ヶ月という短い期間で作成し、徳島県に提出しました。

この文書には、15の市町村の文書がつづり込まれていますが、最も大きな被害を受けた浅川村(現在の海陽町)の書類を見てみましょう。浅川村は起債をする理由として、「震災による津波により村の約8割の住家屋を流され全壊した。また村役場・駐在所・伝染病院などを流出あるいは全半壊した。さらに復旧のためには橋・道路の復旧工事6か所、防潮護岸の復旧工事6か所などが必要で、総額3,694,637円となる。さらに応急の住宅建築費にも1,581,000円が必要である」と被害総額が500万円以上あることを書き、そのうち170万9千円の起債を求めています。この書類の後ろの方にとじられている浅川村の通常年間予算書を見ると25万円に満たない額ですから、この地震による被害額がいかに大きなものだったのかがわかります。

こうした書類のやりとりによって、県内の市町村は実際の復興への足がかりをつかんでいったのです。

市役所や町村役場において作られた公文書は、被害の把握や、復旧・復興に向けた事業を



【写真1】「昭和21年度起債許可書」



【写真2】浅川及び牟岐の被害写真 1



【写真3】浅川及び牟岐の被害写真 2

行うための重要な資料として残されてきました。当時の公文書のうち、さまざまな事実がわかるのは、市町村議会の「議案書」(議会に提出する書類)や「議事録」(議会の記録)です。議会には、役場から南海地震の被害に関する報告がなされ、具体的に復旧・復興のための予算をどのようにするかが話し合われています。

1947(昭和22)年5月17日に行われた浅川村議会の冒頭で復興への施政方針を聞かれた村長は次のように答えています。

わが浅川村は、すべての点において重大な時期に來ています。ご承知のとおり村民すべてが被災している様な状況です。この苦境(苦しい状況)においては、とうていその負担に耐えられず、村自体が何か対策を考えなければならないと思います。(中略)村の所有する基本財産の処分もするし、国からの補助も願わねばなりません。この苦境から脱するためには産業をおこすこともぜひ必要であると思います。村営の企業もぜひやらなければならないと思います。(中略)結論として復興への一番の障害となっているのは、資材の不足と人手不足であります。もちろん資金の必要は申すまでもありません。今日の国内の様子からして復興の困難を思い、将来多年の計画のもとに強い決意をもって施行して行かなければなりません。

浅川村は村全体が大きな被害を受け苦境の中にあるが、村が持っている財産を処分し、国の支援も受けながらも、力強い復興のためにはみずから新しい産業を立ち上げることが必要だと言っています。



【写真4】「昭和22年度浅川村議会議事録」

浅川村のほかにも、宍喰町(現在の海陽町)、牟岐町、三岐田町(現在の美波町由岐)など大きな被害を受けた地域でも当時の公文書が一部残されています。当時の様子を伝えるこうした貴重な資料を、ぜひ次の世代に伝えていきたいと思ひます。

# 南海地震を歴史資料から学ぶ

南海地震の資料は県内各地に残されていますが、ここでは皆さんが学ぶための資料として利用できる主な歴史資料を紹介します。

## 徳島県立文書館

南海地震に関する古文書・公文書などを所蔵しています。

太平記（江戸後期）	康安南海地震、阿波雪（由岐、美波町）の被害など
嘉永七年大地震之記（江戸後期）	多田家文書、安政南海地震、阿波国の被害など※
南朝以来地震抄録（江戸後期）	多田家文書、康安地震以降の地震津波の被害記録※
諸国大地震実録記 安政2年	中財家文書、川内（徳島市）付近の被害
森家文書（宝永・安政）	和田島村（小松島市）宝永・安政地震津波被害からの復旧など
山腰家文書（安政）	答島村（阿南市）、安政津波被害の復旧など
昭和21年起債許可書 昭和22年	昭和南海地震、復旧に関する公文書
南海大地震浅川村震災誌 昭和32年	昭和南海地震、浅川村（海陽町）での被害や復興の状況

※印の分は、解説史料集が出版されています。

## 徳島県立図書館

南海地震に関する古文書・図書などを所蔵しています。

地震見聞録（明治期）	呉郷文庫、安政地震から慶応2年の水害までの記録
阿波海嘯誌略全 昭和11年	徳島県編、古代からの津波、洪水の記録

## 海陽町立博物館

南海地震に関する公文書を所蔵しています。利用のためには事前に連絡が必要です。

昭和22年度浅川村議会会議録綴	昭和南海地震、浅川村議会に関する公文書
復興資金関係	昭和南海地震、復旧・復興資金に関する公文書

## 牟岐町教育委員会

南海地震に関する古文書・公文書などを所蔵しています。利用のためには事前に連絡が必要です。

昭和21年度震災復旧つなみ関係書類	昭和南海地震、牟岐町の復旧に関する公文書
内妻村文書（安政）	安政南海地震、内妻村（牟岐町）の津波被害

## 展示資料一覧

No. 表題	年代	資料番号
<b>南海地震史料を残す</b>		
1 震潮記	1855 (安政2) 年	田井家文書
2 震潮記(刊本)	2006 (平成18) 年	T 453 ㊦
<b>康安から宝永の南海地震史料</b>		
3 太平記	(江戸後期)	個人蔵
4 牟岐八幡神社宝永地震額	1711 (正徳元) 年	牟岐八幡神社蔵
5 去ル亥年地震津波(潮入等の田畠被害を蔵奉行まで報告の件)	1708 (宝永5) 年	㊦300127
6 仕上ル御請書物之事(坂野・和田島両村間ノ新田大地震潮入りにつき新田築立の件)	1735 (享保20) 年	㊦300224
7 申渡覚(一昨日地震以来、大潮、立毛損毛、困窮に付、百姓身持ち等軽くすべきこと・控)	1709 (宝永6) 年	㊦302529
<b>永正・慶長の津波</b>		
8 円頓寺旧記	1721 (享保6) 年	大日寺蔵
9 大日寺旧記	1739 (元文4) 年	大日寺蔵
10 阿波国徴古雑抄(刊本)	1913 (大正2) 年	T 209 ㊦
<b>安政・昭和の南海地震史料</b>		
11 南朝以来地震抄録	(江戸後期)	ニシ/00433
12 諸国大地震実録記并御国我等取混シ有姿記	1856 (安政3) 年	ナカ/00462
13 大地震大津波末代断全冊	1855 (安政2) 年	サカイ/00243
14 海部郡内妻村外間勸農御普請所当月五日之津浪ニ相疼候分相約奉願上帳	1854 (嘉永7) 年	牟岐町教育委員会
15 海部郡内妻村外間勸農御普請所相疼候場所御見分奉願上帳	1860 (万延元) 年	牟岐町教育委員会
16 安政元寅年十一月四・五日大變有増記	1855 (安政2) 年	長谷家文書
17 二番記録(かどや日記)	1838 (天保9) 年	モトキ/00002
18 東由岐浦当家帳	(江戸期)	美波町教育委員会
19 昭和21年度起債許可書	1946 (昭和21) 年	K200200321
20 昭和22年度浅川村議会会議録綴	1947 (昭和22) 年	海陽町立博物館
21 復興資金関係	1947 (昭和22) 年	海陽町立博物館
<b>救恤・支え合い</b>		
22 嘉永七年大地震之記	(江戸後期)	ニシ/00432
23 此度大地震ニ付(触書写)	1854 (嘉永7) 年	ハン/301660
24 嘉永七寅年霜月四日より地震并出火ニ付市中御屋敷見舞控	1854 (嘉永7) 年	フキ/05885
25 大地震并御近火諸事帳	1854 (嘉永7) 年	ムウ/03355003
26 嘉永七寅年十一月五日大地震ニ付御本家様御用覚(本家焼失に付)	1854 (嘉永7) 年	イノウ/05302
<b>復旧・復興</b>		
27 乍恐奉願上覚(船付新田大手堤破壊に付)	1855 (安政2) 年	ヤマコ/00068000
28 乍恐奉願上覚(船付新田大手堤破壊に付願書)	1855 (安政2) 年	ヤマコ/00056000
29 仕渡約定書(船付新田地震高潮にて堤破壊に付借入金)	1855 (安政2) 年	ヤマコ/00039000
<b>昭和南海地震の記録</b>		
30 昭和21年度震災復旧つなみ関係書類(牟岐町役場)	1946 (昭和21) 年	牟岐町教育委員会
31 昭和21年12月震災関係書類(三岐田町役場)	1946 (昭和21) 年	美波町教育委員会
32 徳島県災異誌(刊本)	1982 (昭和57) 年	岩村家文書
33 昭和21年12月21日南海地震調査報告(建設院第一技術研究所概報第16号)	1948 (昭和23) 年	岩村家文書
34 水路要報増刊号 昭和21年南海大地震調査報告	1948 (昭和23) 年	岩村家文書

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

### 協力者一覧(敬称略)

海陽町教育委員会・牟岐町教育委員会・美波町教育委員会・海陽町立博物館  
田井晴代・長谷宏昭・木戸口貢淳(大日寺)・榊正彦(牟岐八幡神社)

### 執筆 「南海地震史料調査委員会」

委員長 高橋 啓(元鳴門教育大学学長)  
委員 町田 哲(鳴門教育大学准教授)  
委員 菅野 将史(松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館学芸員)  
委員 松永 友和(徳島県立博物館主任)  
徳島県立文書館

## 知ろう学ぼう 記録資料に見る南海地震

**特別企画展** 平成28年10月25日(火)～平成29年1月29日(日) 午前9時30分～午後5時  
文書館2階展示室 [入場無料](#)

休館日 毎週月曜日 毎月第3木曜日(祝日と重なった場合は翌日) 年末年始(12月29日～1月4日)

**展示解説** 平成28年11月27日(日)・平成29年1月15日(日)  
午後1時30分～3時 文書館2階講座室・展示室

**南海地震史料調査委員会調査報告会**

平成28年12月17日(土)

午後1時30分～4時 文書館2階講座室

**編集** 徳島県立文書館

**発行** 〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
電話088-668-3700

**印刷** 星印刷株式会社

〒770-0936 徳島市中央通り2丁目19番地  
電話088-652-7508